

なぜ、女性は容姿にこだわるのか？

～相互依存性と自己対象化理論から～

田 中 久 美 子

Why Are the Females Stick to Their Own Appearances?
From the Standpoints of Interdependence and Self-objectification Theory

TANAKA Kumiko

は じ め に

若い世代、特に青年期ではファッションや装いに対する関心は非常に高い（小林，1989）。田中（1995，1997a，1997b）は、高校生・大学生を対象とした日常の被服に関する諸行動を具体化する一連の研究で、被服行動が以下の5つに分類できることを確認している。つまり、①流行に対する関心度やその採用の仕方に関する「流行嗜好性」、②被服による気分への影響に関する「気分依存性」、③被服における他者への同調行動に関する「同調性」、④被服の実用的側面を重視する「機能・経済性」、⑤他者からの注目を集めるような目立つ服を好むといった「注目性」の5因子である。

さらに、被服が自己の諸側面とも密接に結びついていることを検討する中で、被服は自己と社会をつなぐノンバーバル・コミュニケーションの一形態として自己表出的な役割を果たす一方で、身体像や自己像の構築に影響を及ぼす“第2の肌（second skin）”としての機能を持つことが明らかとなった。とりわけ著しい身体変化を迎える青年期において、身体と互いに影響し合って自己を最も具体的に表現する被服は、自己の身体への関心の高さに伴いその重要度は一層増すものと思われる。加えて、被服は容易に他者の目に触れることから、そこに社会的アイデンティティが映し出されるだけでなく、他者あるいは所属する集団との関係性によっても規定されるものと考えられる。そこで、自己と他者の理解の仕方の個人差という観点から自己をとらえた独立的自己理解・相互依存的自己理解（木内，1995）を用いて、個人における他者（集団）との関係性の程度と被服行動との関連を検討した。

1. 相互依存的自己理解

(1) 相互依存性の背景を探る

1980年代末から盛んに行われるようになった自他の概念の文化差研究であるが、Markus &

Kitayama (1991) は“相互独立的自己観・相互協調的自己観”という二つの概念区分を施した。それによれば、独立的自己理解 (independent construal of self) とは、欧米文化を中心として優勢とされるもので、自己を他者から切り離された独立したものと見なし、自己の中にある誇るべき望ましい属性を見出し、それを積極的に外へ表現していくことである (Markus & Kitayama, 1991; 北山・唐澤, 1995; 木内, 1995, 1996)。これに対し、日本をはじめ東洋文化で顕著な相互依存的自己理解 (interdependent construal of self) とは、自己が他と密接に結びつき、その相互依存的、協調的な関係性の中で自己の諸属性を見出すものである (同)。木内 (1995, 1996) は、他の尺度との関連や欧米在住経験者との比較を行い、これらの結果から日本人にとって相互依存的自己理解の方が優勢であることを確認している。

相互依存という言葉に拠らないまでも、従来から存在する日本人論の中でもこのような相互協調性について指摘するものは多い。北山・唐澤 (1995) は、様々な日本人論の中に見られる共通性を整理し、日本における相互協調の形態を特徴づける2つの特性次元、役割志向性と情緒的態度、に着目している。前者は、役割の取得とその実行を通じて周りからの期待を自らの目標として内面化する中で相互協調的主体としての自己を確認するというものであり、後者は、他者との情緒的関与性を指し、相手の立場に立って自ら判断し、行動するといった共感的態度に根ざした相互作用のことである。そして、この2つの融合こそが日本的相互協調の目指すところであるとまとめている。

以上のように、役割遂行や他への情緒的態度の提示による、ある関係性への関与を通じて日本人は一層相互協調的主体としての自己を実現するわけであるが、これは他との関係性なくしては自己を見出すことができないという消極的な一面も含んでいるように思われる。つまり、相互依存や相互協調には、日本的「善き生き方」(北山・唐澤, 1995) の一つとされる他者との調和の他に、他者との関係性を離れては主体的な自己というものが育ちにくいといった功罪両方があるのではないかと考えられる。

後者への指摘が少ないものの、例えば土居 (1971) は「自分がある」とか「自分がない」といった独特の自我意識が日本人に特徴的で、これは同時に個人の周囲との関係を示すものであることを「甘え」理論を用いて説明している。つまり、個人が集団の中に完全に埋没したり、あるいは集団との差異を感じながらも自己を主張できないで集団に従属したりする状態を「自分がない」とし、これに対して、所属集団を否定するわけではないがそれによって否定されることのない自己の独立を保持できる状態を「自分がある」のだというのである。

他者との関係性の中ではじめて自己を見出す日本人にとって「自分がない」生き方を選ぶ方が極めて好都合のように思われる。しかしこれは他に迎合していればそれでよいといった、他人任せの安易な生き方に陥ることにもなりはしないだろうか。高田 (1992, 1993) は日米青年を比較して、相互依存的自己理解傾向が自己概念の不安定性や自己評価の低さに結びつくことを指摘している。また上瀬・堀野 (1995) は自己認識欲求に関わる要因として相互依存的自己理解に注目した結果、相互依存的自己理解が自分のすべきことや進む方向を他者に決めてもらおうとする「決定依存」傾向と有意な関係にあることを示し、例えば自己理解に際しても心理テストや雑誌類に頼る安易な情報収集の仕方が認められると指摘している。

(2) 原因尺度の作成

田中 (1997a) は、相互依存性の背景にあると思われる自我の不確実性に関する諸要因を明らかにするため、木内 (1995)、上瀬・堀野 (1995) の記述を参考に計14項目を独自に作成した (以後、これを原因尺度と略記する)。各項目について、大学生男女 (男子249名、女子313名) を対象に、「非常にあてはまる (7点)」から「全くあてはまらない (1点)」までの7段階で評定させた。この原因尺度14項目に対して因子分析 (主因子法、バリマックス回転) を男女別に行い、固有値1.0以上を因子抽出基準としたところ男女とも2因子が抽出され、その因子構造についても性差は認められなかった (Table. 1)。

第1因子には「自分で考えて行動するより、人に決めてもらう方が気が楽だ」「自分一人ですんなり決めるのが苦手だ」「自分の考えに自信を持ってないことが多い」などの8項目が高く負荷し、「主体性の欠如」因子と命名した。また、第2因子は、「周りの人との関係を大切にする」「集団の秩序を重んじる」「楽しい雰囲気になるよう周りに気をつかう方である」などの6項目から成り、「他者との調和」因子と命名した。

また各因子を構成する項目についてCronbachの α 係数を求めたところ、男女ともいずれも高い値となった (主体性の欠如: 男.80, 女.81; 他者との調和: 男.78, 女.76)。さらに各因子の相互相関についても求めたところ、男女とも有意な相関関係は得られなかった。このことから原因尺度を独立した2つの下位尺度から成るものと判断し、この2因子を構成する項目をもって原因尺度の下位尺度として扱い、第1因子を「主体性の欠如」尺度、及び第2因子を「他者との調和」

Table 1 「原因尺度」の因子分析結果

項目	因子負荷量		h ²
	F 1	F 2	
【F 1：主体性の欠如】			
14. 自分で考えて行動するより人に決めてもらう方が気が楽だ	.76	.09	.59
13. 自分一人だと何をしたいかわからないことが多い	.69	.08	.48
1. 自分一人でいろんなことを決めるのが苦手だ	.69	.12	.48
10. 自分の考えに自信を持ってないことが多い	.66	.11	.45
6. 周りの指示に従って行動していれば安心できる	.65	.25	.48
3. みんなと一緒に自分で考えて行動しようとしなくなる	.64	.04	.41
4. 自分一人で考えるのは面倒である	.61	－.09	.38
12. 他人と真剣な議論をすることがある（－）	－.40	.21	.21
【F 2：他者との調和】			
7. 周りの人との関係を大切にする	－.08	.72	.53
5. 自分勝手な人間だと他人に思われたくない	.29	.69	.57
9. 集団の秩序を重んじる	.12	.67	.46
11. 互いに傷つけないよう自分の言動に注意を払う	.12	.67	.46
2. 独りよがりな行動はできるだけ避けている	.08	.60	.37
8. 楽しい雰囲気になるよう周りに気をつかう方である	－.18	.57	.36
寄与率（％）	27.1	17.4	

※ (－) は逆転項目を示す

田中：なぜ、女性は容姿にこだわるのか？

尺度と呼ぶこととした。

(3) 相互依存性と被服行動との関連

原因尺度（主体性の欠如，他者との調和）と被服行動の各5因子（流行嗜好性，気分依存性，同調性，機能・経済性，注目性）との関係について各々男女別に検討した。その結果，男女とも主体性が欠如していると感じる者ほど，同調性が高い一方，他者から注目されたくないと感じていることが示された。しかし，この同調性と注目性は，他者との調和との間に関連が認められなかった。つまり，同調するとは他者との調和と同義のものではなく，むしろ主体性の無さつまり自分の価値判断に自信が持てないために単に周囲に合わせているだけという消極的な他者との相互作用によるものだといえる。相互依存的な日本社会においては，同調することが集団の和を保つ行動のひとつであるかのように肯定的に見なされることが少なくないが，集団の中に存在することで却って「個」を埋没してしまうという否定的な意味合いが含まれていることも考慮すべきだろう。

また性差については，女子は流行嗜好性と気分依存性を，男子は機能・経済性をそれぞれ高く評価していることが示された。これは，女子が男子よりも，他者の目に触れる表層的側面での被服行動を重視していることを窺わせるものであり，社会的な関係の中で自己を見出し，他者依存적であるという見解（Markus & Kitayama, 1991；木内，1995）を支持する結果といえる。

その一方で，自己の外見にこだわり，相互に傷つけ合うことを恐れた表面的・一時的な人間関係が女子において顕著であることを倉光（1993）は指摘している。事なかれ主義的で，他者との協調性が重んじられる日本社会の中で，性役割的にも争いや対立を回避することがとりわけ女子には求められやすい。しかし，そのため倉光（1993）の指摘するように，却って対人関係が浅薄で表面的なものにとどまってしまう，様々な問題を招来しているとも考えられる。

以上のことから，女子が被服行動において外見的・表層的な面の充実を図ろうとしているのは，単におしゃれへの関心の高さからというよりは，他者への自己表出的な行動に対する意識の高さによるものと言えるが，原因尺度を用いた結果からは自己像の揺らぎ故の他者依存적傾向の存在も認められた。もちろんこの結果は，Markus & Kitayama（1991）をはじめとする自他の文化差研究に基づく相互依存性との関連において得られたものであるが，女子がファッションに関心を寄せたり，自己の容姿にこだわったりするのは洋の東西を問わず普遍的に散見される現象の一つである。それゆえ女子のこのような現象を，主に東洋で顕著な相互依存性だけでとらえることは不十分のように思われる。つまり，女子が自己の外見に対して他者依存적となることについて，文化差によらない別の要因をも考える必要があるだろう。そこで，次に取り上げるのは自己対象化理論である。

2. 自己対象化理論（self-objectification theory）

女子は他者との関係性を意識する中で，一体どのような自分を見出しているのだろうか。梶田（1988）は自己評価的意識の構造的特徴について，男子では“自己へのまなざし”と“他者のまなざし”への両意識が拮抗するのに対し，女子の場合は“他者のまなざし”に関する意識が中

心的になると指摘している。

我々が意識する他者の視線というものは、まず自己の外的側面に注がれ、「自分の姿はあの人にどのように映っているのだろうか?」といった公的自己意識 (public self-consciousness) の高まりともなる。Crocker, Cornwell, & Major (1993) は、このとき他者の視線は評価的なものとして自己に内在化され、新しい自己像形成の契機になるとしているが、この自己像は偏見に満ちたものとなりやすいとも指摘している。これについて、Fredrickson & Roberts (1997) は、内在化の過程で自己にある種のバールがかけられてしまうためではないかと考えた。つまり、彼女らは、アフリカ系アメリカ人が人種差別 (racism) のバールを通して自己をとらえるという DuBois (1903/1990) の研究を引き合いにし、少なくともアメリカ社会において、若い女性は性差別 (sexism) のバールによって、自己評価を行っているのではないかと想定したのである。そして、女性が性的に自己を対象化する現象について、「自己対象化理論」を提唱した。

(1) 対象化の先行要因

女性が自己を性的に対象化するとはどういうことだろうか。その前に、触れておかねばならないのが、美人ステレオタイプ (physical attractive stereotype)²⁾ の存在である。

Dion, Berscheid, & Walster (1972) をはじめとする一連の先行研究で、美人は社会的に望ましいパーソナリティを有するととらえられ、恋人や配偶者としては勿論のこと、職業的地位の対象としても歓迎されることなどが確認されている。また最近では、外見上魅力的であることが主観的幸福感 (subjective well-being) の一要因であることを示す研究 (Diener, Wolsic, & Fujita, 1995) を支持するような風潮が、我が国でも若い女性たちの間で広まり、さらに、彼女たちはやせていることこそが美しいことと同義であるとしてとらえているようでもある。こうした背景には、「女性は美しくあるべき」といった美に対する性役割的な期待や歪んだ社会的価値観が、アメリカ社会だけでなく我が国の中でも広く浸透している事実がある他、非現実的なまでに美の基準を高く設定し、女性の美的関心やスリム志向を煽るようなマスコミ等の過度の報道があることも無視できない。

美に対する過重な社会的圧力下では、Kaschak (1992) の示すように自己の容姿や外見は、他者の視線にさらされるだけでなく、「美的水準」に照らし合わせて厳しく検査 (inspection) もされるのである。ここでは、自己の容姿は自己のアイデンティティから切り離されて、他者が享受し、楽しむためだけに存在するという全く道具的なものに成り下がるほかない。このような状態を Fredrickson & Roberts (1997) は性的対象化 (sexual objectification) と呼んでいる。

性的対象化が進むと、女性にとっては他者が自分の外見をどう見ているかということが最大の関心事になり、外見についての他者からの評価に基づいて自己を評価しようとする傾向が強くなる。他者からの評価を内在化しながら、自己の容姿に一層とらわれるようになるこの状態を自己対象化 (self-objectification) と呼ぶ。極端ではあるが、自己の容姿に対する他者の評価は、自己の現在の日常生活だけでなく、将来の社会・経済的な生活レベルまでも予測するほどの影響力を持つことさえあるという。

しかしながら、対象化過程の中では、自己の容姿に他者が下す評価を推測することだけに心的資源が奪われてしまい、こうした積み重ねの結果、様々な精神的な障害が引き起こされる。

田中：なぜ、女性は容姿にこだわるのか？

Fredrickson & Roberts (1997) はこの中でも、特に自己の身体への羞恥心 (body shame) と摂食障害 (disordered eating) の2つに注目している。

(2) 対象化の結果：身体への羞恥心と食の制限

Tangney, Miller, Flicker, & Barlow (1996) によれば、羞恥心は、自分は無価値で無力だという否定的な自己感情を否が応でも強く抱いてしまうほどの、他者からの厳しい凝視や社会的な価値観にさらされた結果生じるものだとなっている。そしてこの羞恥心が動因となり、さらに次の段階として、自分の身体を社会が理想とする像へより近づけようとする様々な試みが始まるのである。

女子は青年期全般にわたり、男子よりも自分の容姿に対する不満度が高いことが確認されている (Clifford, 1971)。これについて、女子は他者のまなざしを意識し (梶田, 1998)、他者との関係性の中での価値観や規範との比較を行う結果、自分のネガティブな面へ選択的に注意が向けられるという Markus & Kitayama (1991) の見解を考え併せると、次のようになるであろう。つまり、女子は他者からのフィードバックをはじめ、美に対する性役割的な期待やマスコミ等による過度の情報を無自覚的に取り込んだ結果、それらを理想像として内在化する中で現実とのズレに気付き、自己に対して否定的な身体像を抱いたり、自分の容姿を恥ずかしいものと感じて苦しむのであろう。

そうした苦しみから逃れるための試みの一つが食の制限である。体重はある程度自分のコントロール下に置くことが可能なために、やせている姿こそ美しいと感じている女性にとっては、食べる量を調整することが手取り早い手段となる。しかしそうした行為が極度に習慣化すると、拒食や過食などの悲惨な結末を迎えてしまう (Polivy, Herman, Hackett, & Kuleshnyk, 1986) ことは言うまでもない。

(3) 水着は心的資源を消耗させる：

Fredrickson らの研究 (1998)

対象化理論の過程をフローチャートで示したものが Fig. 1 である。

Fredrickson et al. (1997) は構築した対象化理論に基づき、自己対象化の個人差を測る尺度を作成した。さらに、自己対象化は個人的特性としてだけではなく、特定の状況によっても引き起こされるのではないかと考え、大学生に水着かセーターのいずれか一方を着用させる状況を設定し実験を行った (Fredrickson, Roberts, Noll, Quinn, & Twenge, 1998)。

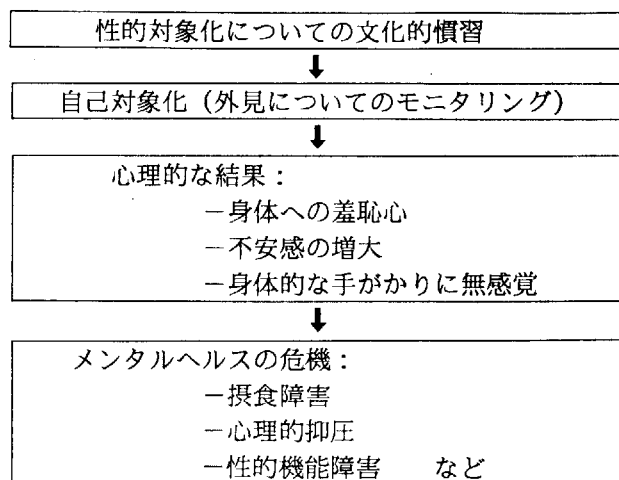


Fig. 1 Fredrickson et al. (1998) による自己対象化 (self-objectification) の過程 (筆者和訳)

実験1では女子のみを対象にしたところ、自分の身体が露になる水着群の場合自己対象化が引き起こされやすく、セーター群よりも身体への羞恥心の高まりやすいことが示された。またその後、チョコチップ・クッキーの味見をするという課題を行わせたが、これは食の制限量を見るためである。実際クッキーを食べた量を変数とし、1枚のうちの半分未満を「真の制限」群、半分から1枚未満を「象徴的制限」群、1枚全部あるいはそれ以上を「無制限」群と分類した。そのうち、「象徴的制限」群が他の群に比べて最も身体への羞恥心を感じているという興味深い結果となった。わずかのかけらを食べ残すのと1枚食べ切るとでは身体に与える影響はさして変わりがないと思われるが、身体への羞恥心から象徴的制限群は1枚全て食べることを躊躇したようである。ただ、この3群が水着・セーターのいずれを着用していたのか、その関係が明確に示されていないために、身体への羞恥心が水着着用による一時的なものなのかどうかは知ることはできない。

続いて実験2では大学生男女を対象として、実験1同様水着かセーターのいずれかを着用させ、「女子は数学が不得手」という先行研究やステレオタイプに基づき、困難な数学の問題を課題として与えた。性別(男・女)×着用条件(水着・セーター)の4群に分類したところ、水着女子は最も身体への羞恥心を感じており、さらに数学課題でも最も成績が悪かった。なお、数学課題では全般的に男子の方が成績が良く、また男子は着用条件間でも成績に差は見られなかった。このことから、水着群の女子は自己対象化が進み、セーター群よりも自分が女性であることを一層強く意識した結果、「女子は数学が苦手」というステレオタイプの活性化が数学課題の成績に反映したのではないかと Fredrickson et al. (1998) は考察している。

この実験で用いられた水着やセーターというのは一年を通じて着る日常的な服の取り合わせではないものの実験結果の示唆するところは多く、その中でも女性は着る服ひとつで自己への認識の仕方が大きく変わってしまう点は重要であると言える。特に、自分が女性であることを意識させ、自己の容姿を客観化、対象化させやすい服であれば、自己の身体に関しての評価感情は一層否定的なものとなり、さらに女性のステレオタイプとリンクしやすい様々な行動の活動性までもが鈍化してしまう。このように、女性は女性であることを認識するが故に、自己の身体、ひいては自己そのものを肯定的にとらえることが困難になるようである。

ま と め

本稿では、被服が身体を含めて自己そのものを映し出すノンバーバル・コミュニケーションの一手段であることに注目し、他者との関係性のとらえ方についてその個人差要因として相互依存性を取り上げ、被服行動との関連を調べた。その結果、女子において他者の目を意識するような被服行動が顕著であり、相互依存的な一面を窺わせるものであった。しかしその一方で、女子が他者の目に触れる、被服の表層的側面を重視するのは、もちろん相互協調的といわれる我が国に限ったことではない。

以上のことから、女子の他者依存的な面を考慮した上でその被服行動や自己の外見に関わる諸行動をとらえるときに、相互依存性といった文化差レベルの問題では解決できない他の要因が存在すると思われる。そこで、女子が他者との関係性の中で他者の視線をどのようにとらえてそれ

を内在化していくのか、その過程を明らかにした自己対象化理論に着目した。この理論に基づく実証的な検討は今後の課題として残されるが、相互依存性と被服行動との関連を検討した本研究の結果を踏まえ、自己対象化理論について再考する。

他者との関係性によって自己が規定されるという我が国においては他者の存在を非常に身近に感じながらも、先述したようにその間柄は表面的で希薄なものでしかないという対人関係上の問題が複雑に絡み合っている。そのために他者の視線に必要以上にとらわれ、「他者が自分を見て何か評価を下している」とまるで自分が厳しく査定されでもしているかのような錯覚に陥っているようでもある。他者依存的といわれる女子に至ってはその傾向は一層強まるのであろう。

また、相互依存性の背景を探索的に検討する中で、自己像が明確でないために単に周囲に合わせているといった「見かけの相互依存性」の存在も確認された。自己、またそれと密接に結び付いた身体について我々が抱いているものは「自己像」や「身体像」という言葉が示すように、あくまで像、つまりイメージという想像の産物でしかない。そしてそのイメージは、まるで風船のようにいとも簡単に膨らんだり萎んだりする、非常に脆くとらえどころのないものである (Fig. 2)。そうした弱くて揺らぎやすい存在であるからこそ、他者からの評価や社会的な意味づけを頼りにして、実体のある対象化できるものに変えようとしているのかも知れない。しかし、その対象化に至る内在化過程において弱いイメージが補強されるどころか、いくつものイメージの間をさまよい、次第に誤った身体像や自己像を作り上げてしまうようである。

他者の視線を意識すること、そして他者の視線が最も向けられやすいと思われる自己の容姿を意識すること、これが女性が着る服にこだわったり、おしゃれをしたりする原動力となるのも確かである。しかしその一方で、上述したように自己像や身体像が脆弱であれば、他者の視線は自己を直接的に攻撃する脅威的なものと映るに違いない。また、自分がこうありたいという明確なイメージを持たないならば、自分自身にとってはどうであれ、集団や社会が良しとする価値観や基準に安易に寄りかかる他ない。

女性である Fredrickson & Roberts (1997) が構築した自己対象化理論によって、女性であることを強く意識づけられると活動性が抑制されてしまう、というような女性にとってあまり喜ばしくない事実を顕現することになったのは皮肉な話である。しかしこの対象化理論は、女性が他者からの評価、また他者に見られているという意識をどのように自己観形成に反映させていくのか、そのメカニズムを詳細に示すものとして非常に有益であったといえる。

なぜ女性は自分の容姿や服装にこだわるのか？

これには他者から見られるということが非常に大き

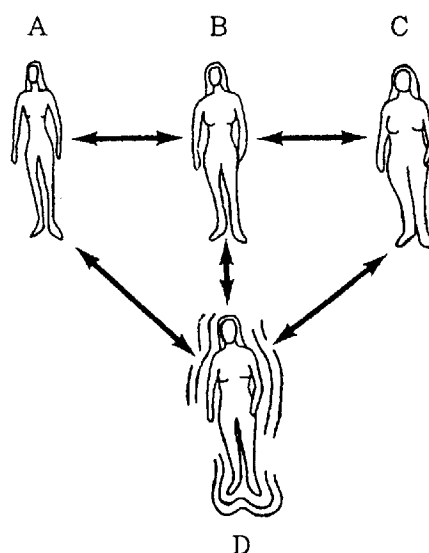


Fig. 2 弾力性ある身体像 (the elastic body image) の様相
(Myers et al., 1992) (筆者和訳)

A：社会的に表象された理想の身体像

B：内在化された理想の身体像

C：客観化された身体像

D：現実の身体像

く関わっており、女性にとってはそれがいかに重要で、また心理的な負担を強いるものかが相互依存性と自己対象化理論を通して検討する中で明らかになった。日常営まれる他者との相互作用において他者の視線を回避することはほとんど不可能ではあるが、女性自身が自分の身体を他者の目に触れる受動的な対象としてではなく、もっと主体的かつ能動的なものとしてとらえ直すことは可能であるし、その必要もあるだろう。また Fredrickson et al. (1998) の研究が示唆するように、身に着ける服次第で女性自身の活動性を大きく変えることができるのであれば、他者の視線からの安全弁的な役割を被服にもっと効果的に負わせるべきでもあろう。

今後、自己対象化理論をさらに深めて実証的な検討を行っていく上で、女性が自己対象化を経験した時に、それが自己の否定的な側面に直結してしまうのではなく、自己の多様な側面が活性化されることはないのか、またされるとすればそれは具体的にどのようなものなのかに注目していきたい。

註

- 1) 本稿の作成に当たり御指導を賜りました京都大学大学院教育学研究科子安増生教授に深く感謝いたします。
- 2) 本来 “physical attractive stereotype” は、女性だけでなく男性にも適用されうる語である。またこれに対する日本語訳も研究者間で様々であり一貫したものではない。それゆえ、本論では女性の外見について述べることから、垣内 (1996) と同様の観点に立ち「美人ステレオタイプ」という語を用いることにした。
- 3) 本稿の一部は日本心理学会第61回大会 (1997) で発表されている。

《引用文献》

- Clifford, E. 1971 Body satisfaction in adolescence. *Perceptual and Motor Skills*, 33, 119-125.
- Crocker, J., Cornwell, B., & Major, B. 1993 The stigma of overweight: Affective consequences of attributional ambiguity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 60-70.
- Diener, E., Wolsic, B. & Fujita, F. 1995 Physical attractiveness and subjective well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 1, 120-129.
- Dion, K., Berscheid, E., & Walster, E. 1972 What is beautiful is good. *Journal of Personality and Social Psychology*, 24, 285-290.
- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- DuBois, W. E. B. 1990 *The souls of Black folk*. New York: Vintage Books. (Original work published in 1903)
- Fredrickson, B. L., & Roberts, T. 1997 Objectification theory: Toward understanding women's lived experiences and mental health risks. *Psychology of Women Quarterly*, 21, 173-206.
- Fredrickson, B. L., Roberts, T., Noll, S. M., Quinn, D. M., & Twenge, J. M. 1998 That swimsuit becomes you: Sex differences in self-objectification, Restrained eating, and math performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 1, 269-284.
- 梶田叔一 1988 自己意識の心理学〔第2版〕 東京大学出版会
- 垣内理希 1996 美人ステレオタイプは存在するか 社会心理学研究, 12, 54-63.
- 上瀬由美子・堀野 緑 1995 自己認識欲求喚起と自己情報収集行動の心理的背景——青年期を対象として—— 教育心理学研究, 43, 23-31.

田中：なぜ、女性は容姿にこだわるのか？

- Kaschak, E. 1992 *Engendered lives: A new psychology of women's experience*. New York: Basic Books.
- 北山 忍 1994 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, 10, 153-167.
- 北山 忍・唐澤真弓 1995 自己：文化心理学的視座 実験社会心理学研究, 35, 2, 133-163.
- 木内亜紀 1995 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 66, 100-106.
- 木内亜紀 1996 独立・相互依存的自己理解 — 文化的影響, およびパーソナリティ特性との関連 心理学研究, 67, 308-313.
- 倉光 修 1993 現代青年の自己意識と対人関係 梶田毅一(編) 現代のエスプリ307, 自己という意識, Pp. 103-113.
- 小林茂雄 1989 現代社会で被服が表現するもの — 生活の表現へ 日本家政学会(編) 表現としての被服 朝倉書店
- Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Myers, P. N. & Biocca, F. A. 1992 The elastic body image: The effect of television advertising and programming on body image distortions in young women. *Journal of Communication*, 42, 108-133.
- Polivy, J., Herman, C. P., Hackett, R., & Kuleshnyk, I. 1986 The effects of self-attention and public attention on eating in restrained and unrestrained subjects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1253-1260.
- 高田俊武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社
- 高田俊武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較 — 日本人大学生にみられる特徴 — 教育心理学研究, 41, 339-348.
- 田中久美子 1995 被服行動と自己の心理的諸側面との相互作用 京都大学教育学部卒業論文(未公刊)
- 田中久美子 1997a 大学生の被服行動に関する研究～自己関連尺度を用いて～ 京都大学教育学研究科修士論文(未公刊)
- 田中久美子 1997b 青年期女子における被服行動と自己の諸側面との関係 京都大学教育学部紀要第44号, 179-191.
- Tangney, J. P., Miller, R. S. Flicker, L., & Barlow, D. H. 1996 Are shame, guilt, and embarrassment distinct emotion? *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1256-1269.

(博士後期課程2回生, 教育心理学講座)